

名井大使

二〇一四年二月一九日 開催 〈本学イペロアメリカ言語学科 共催〉

## アフリカの中のアンゴラ、世界の中のポルトガル語圏

名井良三

(執筆：舛方周一郎)

■ 講演者……名井良三(前駐アンゴラ日本全権大使)  
■ 司 会……舛方周一郎(本学イペロアメリカ言語学科専任講師)

二〇一四年二月一九日、本学二号館の教室において、前

駐アンゴラ日本全権大使による特別講義「アフリカの中のアンゴラ、世界の中のポルトガル語圏」が開催された。名井大使は、東京外国語大学ポルトガル・ブラジル語学科を卒業後、外務省に入省されたのち、在ポルトガル大使館第一等書記官、駐シカゴ総領事館領事、駐モザンビーク大使

館参事官、外務省在外公館課現地職員管理官、参議院国際部交流課長、駐ベレン総領事を歴任され、二〇一一年から二〇一四年一月まで、駐アンゴラ日本全権大使を務められた。世界のポルトガル語圏諸国を中心に外交の舞台で活躍されてきた名井大使は、二〇一四年二月をもって外務省を退官されることとなり、当日の講義は外交官としての外部での最後の職務だったという。なお、少人数の教室で、なるべく多くの学生たちと交流をしたいという大使のご要望もあり、特別講義は参加した学生たちとの対話も交えたものとなった。この講義の内容として、名井大使にはアンゴラの政治経済の現状だけでなく、アンゴラを含むアフリカ諸国やポルトガル語圏世界との関係、外国語習得の心得など、自身のご経験を踏まえて幅広くお話し頂いた。さらに講義の終了後も、話し足りずに教室に残っていた学生たちに対して、時間の許す限り、丁寧に受け応えをしてくださっていた。その様子からは、冷

徹な印象が先行する外交という舞台の中にあっても、常に温厚かつ真摯な態度で相手に接してこられた名井大使の人柄を垣間見ることができた。以下、特別講義の内容を紹介する。

### 世界の在外公館とポスト

まだ私は日本に戻ってきてひと月もたたないのですが、今日が外務省をやめる日となります。これで私の仕事が終わるのかなという思いとともに、今日は記念すべき日ということで、神田外語大学での講義を非常に楽しみにしてまいりました。

私は、最後のポストとして、アンゴラという国で日本国の大使を務めておりました。日本は、世界の多くの場所に大使館と領事館をおいています。国対国に関することは大使館の仕事ですが、総領事館はその地域で日本を代表するところです。在外公館の中には様々な役目やランクがあります。まず、日本を代表してその国の大使となる場合は「特命全権大使」とも呼ばれ、全権大使が署名をすると、それが日本国の意思になるという意味があります。そうではなく、ランクだけの大使もいるのですが、私の場合は特命全権大使でした。その他に、公使、参事官、一等書記官、二等書記官、三等書記官などというランクが続きます。

また、神田外語大学の学生からも時々採用される派遣員と

いう仕事もあります。派遣員の方にはとてもお世話になっていきます。派遣員には、その国の言語が完璧でない方もたくさんいるので安心していただきたいのですが、採用されるにはその国の方とのコミュニケーションがある程度とれる必要があります。この大学からも、来年度は二名の方が派遣されるということですが、派遣員はいろいろな大使館と総領事館にいます。ただ、問題は海外で三年間働かなければならないことです。また派遣員になればその国の言葉を学べるかといえ、やはり努力しなければなりません。その国の言葉だけでなく、日本語も在外公館の中で使って仕事をしなければならぬわけですから、非常に勉強になるはずですよ。他の方も、ぜひやられたらいいと思います。

他に外務省や公務の関係ですと、専門調査員として経済学などの専門を生かして、私たちと一緒に働く人もいます。その方も言葉がある程度できて、大学院の修士課程を修了するレベルの学歴が必要となります。

ところで、私は外務省のなかでポルトガル語を専門にしてきました。外務省に入ると、私は二年目、三年目をブラジルの大学に通っていました。さらに私は入省から一〇年たつて、特別にもう一度ブラジルのブラジリア大学の大学院に行くことができたのですが、私は学生時代にもポルトガルのコインブラ大学に一年弱の間、留学していました。

このように派遣員や専門調査員のような仕事はありますが、正式の外務省の職員になるように、神田外語大学でも一学年から三名、四名程度は試験を受けてみようと思う人がでるといいと思います。ぜひ、頑張ってください、先生方もぜひもうした学生を後押ししてください。ポルトガル語でも中国語でもスペイン語でも英語でもよいので、外務省に入るための試験を目指してください。本日この講義に参加しているみなさんの中からも、外務省の職員になることは決して不可能なことではありません。そして様々な道を通じて、ぜひ外国で活躍してほしいと思っています。

### 世界情勢とアンゴラ経済

今日のニュースで、ロシアの経済が難しくなつたとありましたが、その原因の一つに石油の価格が下がっていることがあげられます。アンゴラもまた石油国で、国の経済の八割程度を石油で賄っています。そのため、アンゴラはアフリカの中でもお金持ちで、非常に力が強い国とされてきました。

ではその石油が、現在の国際情勢とどのように関係しているかというと、一つは石油価格の低下によりロシアの政治・経済力が低下していること、もう一つはアメリカとキューバが国交を結ぼうという動きがみられていることです。キューバは、近接する石油大国であるベネズエラから支援をうけて

経済を維持してきたわけですが、これだけ石油の価格が下がると、ベネズエラとの関係もなかなか難しくなってきました。こういうときだからこそ、アメリカが外交の舞台で全面にでると、国交正常化がうまくいくかもしれないという思惑もあるのかもしれませんが。それからアンゴラに関しても、大統領が様々な演説を通じて伝えてるように、石油の値段が非常に下がることによって、アンゴラの経済も非常に難しくなるこのことでした。このように、ヨーロッパでいえば、ロシア、中南米でいえば、ベネズエラ、アフリカでいえば、アンゴラ、ナイジェリアなどの石油国にとって、現在の世界経済は非常に難しい状況にあるのです。

実は、アンゴラや赤道ギニアなどの石油国は、物価が高いことでも有名です。今年、世界で一番外国人が暮らすのに物価が高いとされていたのは、アンゴラの首都のルアンダで、二番目がモスクワ、三番目が東京とされています。さて、これがどのくらい高いかというと、2DK位のアパートに単身で入ると、一か月で一〇〇万円くらいかかります。そのため、大企業であってもアンゴラにはなかなか駐在員を送ることができません。ホテルも高いので、ホテルに住みながらですと、この値段以上になります。アンゴラでの生活はなかなか難しいものです。もちろん現地の人々も暮らしていますが、現地の方々の生活は貧しく、家には水や電気がない家庭も多いの

で、工夫しながらやりくりしている状態です。

アンゴラのもう一つの難しさとしては、非常に閉鎖的な国であるということです。東西の冷戦により、かつて世界は共產圏と自由民主主義圏とに二分しましたが、冷戦の最初の犠牲者がアンゴラであろうといわれています。何の犠牲者かというところ、アンゴラは一九七五年に独立してその後、内戦を始めますが、その背後にはソ連やキューバがいたり、アメリカや南アフリカがいたり、異なる国々がそれぞれのグループを背後から後押しする中で内戦を行っていたことで、アンゴラという国は翻弄されてしまいました。結局、この内戦でも勝利を治めたグループが現在の政府を担っています。このように他の国の影響をうけてきたため、非常に閉鎖的になってしまったのです。いまでも入国許可を得るのが難しいことや、他にも日本の青年海外協力隊の支援を受け入れられないなどの姿勢が見受けられます。ビジネスなどの場合ですと、苦勞しながらもなんとか入国できるという状態です。

### アンゴラ政治の特徴

さて、アンゴラの経済に加えて、政治の特徴についても触れておきましょう。アンゴラは一九七五年にポルトガルから独立を果たしました。アフリカのポルトガル語圏は五か国ありますが、実はすべて一九七五年に独立しています。ただし、

アンゴラは大統領制を採用して、三〇年以上の間、一人の人物が大統領を務めています。以前はリビアのカダフィ、エジプトのムバラク、ジンバブエのムガベなどが、一人で長期政権を担っていることで有名でした。アンゴラも、それらの指導者の陰にかくれて、一九七九年から現在にいたるまで一人の人物が大統領を務めています。選挙も実施しているのですが、必ずしも独裁とはいえないのですが、二〇一七年に次の選挙があるため、この選挙がどのような結果をうむのかが非常に楽しみです。現職の政権は様々な経済的な事業を行っていますが、彼らが頭に描いているのは、二〇一六年から二〇一七年にかけて大きな事業を完成させて、国民からの支持をえようとしていることです。例えば、日本のNECが関与する海底ケーブルの設置です。これはアフリカから大西洋を横断して、ブラジル北東部のフォルタレーザを結ぼうとするもので、いずれはヨーロッパの海底ケーブルや、アメリカの海底ケーブルを連結するものです。そうしたケーブルの連結をするうえで、アンゴラがアフリカの拠点となろうとする画期的な事業です。

### CPLP

CPLP (Comunidade dos Países de Língua Portuguesa: ポルトガル語諸国共同体) はいまままで八か国だったのですが、今

年から九か国になりました。もともとの加盟国はポルトガル、アンゴラ、ブラジル、モザンビーク、東ティモール、ギニアビサウ、サントメプリンチペ、カーボベルデでした。しかし、今年七月にCPLP首脳会議があり、新たに赤道ギニアが加盟してCPLPは九か国となりました。なお赤道ギニアは、ポルトガル圏ではないのではと思われるかもしれませんが、この赤道ギニアがどのようにCPLPに加盟したかという点、赤道ギニアはアフリカの中では唯一のスペイン語の国として孤立していたので、公用語を指定して、第一公用語をスペイン語、第二公用語をフランス語、そして第三公用語をポルトガル語として学校で学ばせることとしました。このように、純粋なポルトガル語圏以外の国もCPLPに加えることで、これからは世界の中でポルトガル語圏が拡大していくのではないかとアンゴラのメディアでも大きく取り上げられました。実は日本も、アジアで初めてのオブザーバーとして関係しております。日本もCPLP内のアフリカ諸国との関係を深めようと努めています。

## アフリカ

世界、とりわけ日本企業を含めた大企業などのビジネスの世界では、いまアフリカへの関心が深まっており、「世界で最後の成長市場」ともいわれています。確かにアフリカは貧し

いというイメージがありますが、一方で経済成長は5%以上を継続しています。他にこれだけの経済成長を見込める場所がなくなってしまうので、商社などの企業を中心にアフリカに注目が集まっているわけです。最初に人類が現れたのもアフリカです。しかしこのアフリカの印象が悪くなったのは、一四〇〇年代から一五〇〇年代に、ヨーロッパ諸国がアフリカに進出してきてからです。その後、一八八四年のベルリン会議において、外部のヨーロッパ諸国がアフリカを勝手に分割してしまうことで、それぞれの土地に住んでいた民族は政治的な分断を余儀なくされました。しかし第二次世界大戦が終結して、一九六〇年にアフリカ諸国の多くが独立を果たすことで、アフリカというアイデンティティが形成され、成長に向けて動き出しました。

こうした中で、一九七五年の最後まで領土を手放さなかったのがポルトガルでした。ポルトガルはそれぞれの領土を植民地としてではなく、県(Provincia)として扱っていました。宗主国からの独立が遅れてしまったために、アフリカのポルトガル語圏五か国は、その後の経済的な発展も遅れることとなったのです。

## ブラジルと日系人

私がブラジルで最後に赴任した場所は、アマゾン地域のパ

ラ州にあるベレンという地域です。なぜここに総領事館があるかというと、大きな日系社会が存在しているからです。ベレンは日本人によるアマゾン移住の最初の地域です。日本人最初のブラジル移住としては、一九〇八年の笠戸丸が有名ですが、それから約二〇年後の一九二九年にアマゾンへの移住が始まりました。このパラ州の州都ベレンから、約二〇〇キロの場所にトメアスという場所があります。トメアスは、胡椒を農産物として生産することで一大発展を遂げ、ブラジルでの日系人の地位を向上させるとともに、ブラジルの経済成長に貢献しました。現在のブラジルでは日系人の評判は高く、信頼のおける人たちだという印象があります。国会議員などの政治的な地位を獲得した方や、国立大学の学長など、社会的な地位の高い方々も多く輩出しています。

### 最後に

外国に住んでいれば、それだけで外国語が話せるというのは間違いです。海外移住者の方でも、一〇年、二〇年たつても、その国の言葉をよく話せない人はいます。ですから「住むこと」話せること、理解すること」というわけではありません。これから留学する学生も、ただ淡々と学校に通っているだけで外国語を読めたり、話せたりできるようになるわけではなく、かなりの努力が必要です。

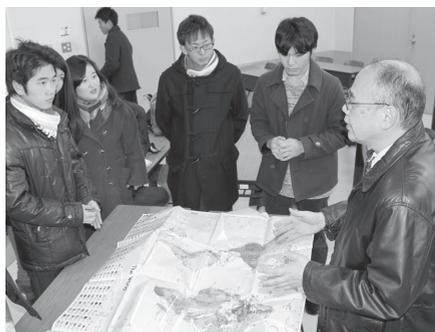
例えば、通訳法などの面から言っても、会話ができれば、通訳ができるというわけではなく、通訳ができて、スピーチができないという人もいます。一つの言語における用途の様々な側面の違いを理解して、体系的にカバーできるようにならないといけないでしょう。通訳一つでも、みんなと一体となって質問のできる通訳や、自分が一切、質問のできない通訳などもあり、頭の使い方も異なります。またスピーチも、様々なスピーチの違いがあるので、それらの違いを理解しないと、なかなか高いレベルの外国語の能力には達しないと思います。

さらに時事ポルトガル語などに関しても、どのようにして自分の頭の中に取り入れていくか、よく考えてみてください。ある言葉をせっかくだかインプットしたのであれば、その言葉を使うアウトプットする方法も身につけなければなりません。これは英語などの他の言語においても当てはまります。ですから、外国語の勉強は、自分の頭でよく考えて、常に意識をしながら取り組んでください。

アフリカの中のアンゴラ、世界の中のポルトガル語圏



会場風景



特別講義終了後の名井大使と学生たちとの交流